成願寺

季報
96

平成25年6月18日
(2013年)

目次

「実践して生きるということ」岡本道雄……1
「思い返すこと―中野坂上で暮らした昭和と平成―」熊倉道子……6
春の観音詣りの報告……10
山内短信……12

発行　多宝山成願寺
〒164-0012 東京都
中野区本町 2-26-6
電話　03-3372-2711
制作　地人館

双葉鉄道工業株式会社 新入社員 研修坐禅会 説教

実践して生きるということ

岡山県徳重寺 住職 岡本道雄

岡山県徳重寺住職
岡本道雄老師

本日は、みなさまにははじめての坐禅を修行していただきました。足はしびれる、腰は痛くなるで大変な思いをされたのではないかと思いますが、なぜ坐禅を修行するのでしょうか。それは、仏教の宗祖お釈迦さまが、お悟りを開かれた際にされていたのが坐禅だったからなのです。

インドの北側にネパールという国がございますが、お釈迦さまは当時その地にあった釈迦国の王子として、二千五百年ほど前の四月八日にお生まれになりました。王子としてなに不自由することなく育ち、結婚もして子どもにも恵まれています。それなのに、生老病死といいまして、人間の持つ四つの苦しみに悩み、とうとう二十九歳にして城での豊かな生活を捨て修行の旅に出られた。

そして六年もの間、いろいろな師の元を訪れ、身体をいじめるような苦行をしたり、断食をしたりと修行を重ねられたわけです。ですが、お釈迦さまが求める真の悟りは得られなかった。お釈迦さまは、「真の悟りを開くためには、自分自身のこころが静かに落ち着いていなければならない」と気づかれて、苦行を捨て、坐禅をはじめられたのです。

そして、城を捨てて六年後の十二月八日、明けの明星をご覧になり、忽然とお悟りを開かれた。それ

からお亡くなりになる八十歳までの四十五年間、インドの諸国を説法して歩かれました。その説法が、いまに伝わるお経、経典ということになるわけです。

みなさま方は、お経といいますと、お坊さんが葬儀や法事のときに読むものであって、死者に対するもの、私たちには関係ないと思っておられるのではないでしょうか。しかし、いま申し上げましたように、お釈迦さまの説法をまとめたものがお経ですから、生きている人間に、お釈迦さまが、「人間としてどう生きたらよいか」を説かれたのがお経なのです。

はるか昔のインドでお釈迦さまの話されたお言葉が経典となって、現在の日本に伝えられているわけですが、最初に中国へと伝わりました。みなさま方ご存じのまんがに西遊記というのがございます。そこへ登場する三蔵法師、正式には玄奘三蔵と申される中国のお坊さんが、インドから経典を中国へと持ち帰り漢訳された。

では、坐禅はインドからどう伝わったのかと申しますと、これもみなさま方ご存じ。お釈迦さまから数えて二十八代目の菩提達磨、つまりだるまさんがお伝えになった。菩提達磨はインドのお坊さんですが、中国南方へと渡海し坐禅を広められました。

こうした詳しいことはご存じなくても、みなさまは縁起物の真っ赤で丸いお姿のだるまさんはよくご存じと思います。

あのだるまさんはなぜああいうお姿かと申しますと、菩提達磨は中国へ渡られると少林寺というお寺で面壁九年、つまり九年もの間、ただひたすらに坐禅に打ち込まれました。その様子を後ろから拝しますと、手も足も前で組まれていますから見えません。そして赤いお袈裟を身に付けられていました。そのお姿を模してだるまさんの形になった。でも、なぜ縁起物なのかと申しますと、九年もの間ひとつのことに打ち込む精神力と、百五十歳まで生きたと伝えられる菩提達磨の長寿、そういったことにあやかろうという表れなのです。

玄奘三蔵が伝えた経典と菩提達磨が伝えた坐禅は、中国で興隆し、やがて日本に伝わったわけです。

仏教の基本のみ教え

お手元の資料をご覧頂きますと、はじめに「七仏通誡偈」が載っております。ご説明しますと、

諸悪莫作　諸々の悪を莫さず

衆善奉行　善いことを行ないなさい

自浄其意　そうしたことで自身の心が浄くなる
是諸仏教　これこそが仏教である

みなさま方、いかがでしょうか。「悪いことをするな、善いことをせよ」なんてあたりまえのことではないか、と思われませんか。

昔、中国沂州というところに道林禅師というお坊さんがおられました。道林禅師は坐禅ばかりされていた方で、しかも木の枝の上に坐っておられる。あるときその噂を聞きつけた沂州の高官で、日本では詩人として知られる白楽天という方が、禅師を訪ねて行かれたそうです。

「道林禅師さま、そのような場所で坐禅をされますと、いつ枝が折れて怪我をされるか、また枝が折れなくても、強い風が吹けば危ない。命をおとされることがあるやもしれません」と、問われます。

すると道林禅師は、「人のことを心配せず、自分のことを心配しなさい。いまの地位や名誉を誇っていてもいつか無常の風は吹く。それでもあなたのいる場所は危なくないのか」と、これは人生の心構えを説いておられるのでしょう。

白楽天は続けてこう問われます。

「お釈迦さまの教えはたいへん立派なものと伺っていますが、ひとことで誰でも理解できる教えはございますか」。すると道林禅師は「七仏通誡偈」をおっしゃるのです。すなわち、「悪いことはするな、善いことをせよ」でございます。

白楽天は、「そんなことは三歳の子どもでも知っている」と半ばあきれ気味に言うわけでございますが、道林禅師は、「八十、九十になるような大人でも、なかなか日々の生活で実行することができないではないか」と、こうお答えになられた。

これは、お釈迦さまの教えといいますのは、頭で理解するのではなくて、日常の生活において実践するということ。頭で知っていても、できなければなんの意味もありません。それを道林禅師はおっしゃられたのです。

みなさま方は社会人としての一歩を歩まれたばかりと伺いました。これまでは、あそこの学生さんのしたこととか、あそこの家の子がしたことと大目にみてくれましたが、今後は自立した大人となって自分の責任で人生を歩まれるわけです。その指針として一番の基本となるのが、この「七仏通誡偈」に集約されているわけでございます。

お手元の資料に戻りまして、次の詩をご紹介いたします。

人は唯一人では生きられない
多くの人や物に支えられ
生かされることによって生きている
その恩に報いる唯一つの道は
人を生かし物を生かすことである

いかがでしょうか。人間が生きていくというのは、全くこの通りでございます。人間という漢字を改めて見返してみますと、「人」は支え合って、その「間」で生きているということがわかります。いくら財産や地位や名誉がある人でも、一人で生きて行くことは絶対にできません。それは、ライフラインひとつとってもそうです。いくらお金があっても、自分一人で水道やガスや電気を作って使うことはできません。他の多くの人の力が必要なわけです。

こう考えますと、自ずから自分が社会人としてどういう生き方をしたら良いかがわかってまいります。働くということは、給料のためだけではありません。自分が働くことによって、誰かの役に立ち、誰かを支えることができる。こうしたことを念頭において仕事をいたしますと手が抜けません。先ほどの「悪いことはするな、善いことをせよ」に繋がってくるわけでございます。

修証義に見る実践の要

この成願寺様は、曹洞禅を伝える禅宗のお寺です。ご本山は福井県に道元禅師が開かれた永平寺がございます。もうひとつ横浜の鶴見に瑩山禅師の開かれた總持寺がございますが、道元禅師の主著である『正法眼蔵』を集約したお経に『修証義』がございます。一部を紹介させていただきます。

生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり。
（第一章「総序」より）

これはどういうことかと申しますと、生まれてから死ぬまで、つまり人生をどう生きるかをはっきりと明らかにさせることが、仏教徒として一番大切なことであるというのです。

みなさま方、お若い。でもいつ人生の幕を閉じることになるか誰にもわかりません。平均年齢ぐらいまで生きるだろうと漠然と思っていましても、明日を迎えることが絶対にできるかどうかはわかりませ

ん。そんなこと言ったって、明日もあさっても来るさと思って過ごしていたらだめ。そうではなくて、いまをどのように人間として生きていけば良いのかをはっきりとさせる、それが仏教徒の一番重要なことだと、道元禅師は最初におっしゃっておられるのです。

菩提心を発すといふは、己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと発願し営むなり。

（第四章「発願利生」より）

東日本大震災の際には、南三陸町の防災課にお勤めだった遠藤未希さん、まだ二十四歳とお若い方が、自分の身の安全よりも先に放送で町民に避難を叫び続け、ご自身はその尊い命をおとされました。遠藤さんの放送を聞いて、多くの町民が高台に避難することができた。テレビや新聞などでも報道されたのでご存じの方も多いと思いますが、「遠藤未希さんのとられた行動は、仕事に対する使命感、人を救おうとする優しさ思いやりに溢れている。こうしたことを未来を担う子どもたちに伝えていきたい」。こうした趣旨で、埼玉県では遠藤さんのご両親に許可をいただいた上で、公立の小中高合わせて一二三二の学校で、道徳の時間に紹介することが決まったそうでございます。

この遠藤さんのとられた行動といいますのが、まさに「菩提心を発すといふは…」にぴったりとあてはまる。ご説明しますと、菩提心、つまり仏のこころをおこすということは、自分の幸せよりも先にみなさんを救おうと誓って修行をする、生活をするということ。遠藤さんが、自分が高台に避難するよりも先に、多くの人たちをまず避難させたということ、道元禅師の教えをご存じだったかわかりませんが、日頃から身についていて実践された方だったのではないかと思います。

衆生を利益すというは四枚の般若あり、一者布施、二者愛語、三者利行、四者同事、是れ則ち薩埵の行願なり。

（第四章「発願利生」より）

多くの人たちに多くの利益をもたらすためには、すぐれた四つの智慧がある。その四つが布施、愛語、利行、同事であるというのです。

「布施」といいますのは、お寺でお経をあげていただきますとお金を包んでお布施をされるかと思いますが、それだけが「布施」ではございません。困っ

ている人々へなにか自分のできることをする。震災の際は全国から集まる衣類や食料がまさに「布施」でありました。「愛語」は、慈しみの心を持って言葉を掛けること。愛情から出る心からの励ましや優しい言葉、これは時として他者を勇気づけ力づけることができます。「利行」は、「利他行」とも申しますが、他人に対して役に立つ、利益になる行ないをいいます。ボランティアなんかは一番の「利行」ではないかと思います。最後の「同事」は、他者とこころを一つにして歩みを共にすることです。

道元禅師は鎌倉時代に、この四つの智慧を説かれましたが、現代においても同じであることがよくわかるわけでございます。

曹洞禅は「只管打坐」を修行の中心としております。これは坐禅にただひたすらに打ち込むということですが、ひいては、いま自分が取り組んでいる目の前の事柄すべてにひたすらに打ち込むという意味でございます。無駄な事柄というのはひとつもありません。朝起きてから夜眠るまでを大切にして、目の前のことに打ち込む。こうした、いまを大切に生きるということが、即ち仏教のみ教えなのでございます。

合掌

思い返すこと ―中野坂上で暮らした昭和と平成―

成願寺 檀信徒 熊倉道子

春から夏、本年も空襲敗戦空腹を思い出す。私たちの日本は昭和十年（一九三五）頃より二十数年間、社会大変動に曝されました。中野坂上の地でその時節を見続けて、育ち暮らした一人が熊倉さんです。（住職・貢人）

私は昭和二年、北海道釧路に生まれました。九歳のときに父方の祖母が亡くなって、父と兄と新潟へ葬儀に出向きました。そのとき北海道からはじめて出ましたので、せっかくだからと遠回りして、東京中野に住む父のお姉さんのところへ三人で寄ったのです。奇しくも二・二六事件の日でした。

私にとって伯母にあたる人でしたが子どもがいませんで、親たちが話し合って、私は養女として伯母の娘になることが決まりました。

いよいよ東京へ越す日、釧路駅から一人で東京行きの蒸気機関の汽車へ乗り込みました。見送りの父が「上野までこの人たちと一緒にいるんだよ」と新

婚旅行に出かける若い夫婦に頼んでくれて、おじゃまだったと思いますが、その方たちと釧路から上野まで二泊三日の道中でした。

当時は北海道の大地をぐるぐると汽車がまわって、函館までが三十時間ぐらい。それから青函連絡船に乗って、今度は青森から上野までがまた三十時間ぐらい。汽車がトンネルに入れば急いで窓を閉めないと、汽車の煙ですすだらけになってしまう。いま思いますと、外国へ行くような心細い思いもしたわけですが、上野に着けば伯母が迎えてくれると思ってがんばって来たのです。

上野で出迎えてくれた伯母は、私が疲れただろうと中野坂上までタクシーで連れて帰ってくれたのですが、その頃のガソリンはとても臭くて酔ってしまって、汽車よりもタクシーが辛かった。それが養女として中野へ来た最初の想い出。この日から伯母が私の母となりました。

春には桃園尋常小学校に転入しました。宮様が杉並の蚕糸試験場（現・蚕糸の森公園）に向かわれるというと、青梅街道にずらっと並んでおじぎをしてお見送りします。ですが、いまの方は想像もできないと思いますが、お顔なんて見たことないんです。本当に神様のような存在として教育を受けたのです。

桃園に転入した当初は北海道弁と江戸弁では言葉が違って、ずいぶんからかわれて嫌な思いもしました。でも、いまのようないじめとは違いましたし、私も北海道から一人で出てきて、実家にも母（養母）にも心配させたくありませんでしたから、負けていなかったんですよ。その母も平成元年に九十歳で亡くなりました。施設などには入れず、家族の元で暮らしました。大変なこともありましたが、晩年になって「あなたと暮らせて良かった、幸せだったよ。ありがとう」と言ってもらえたことは、私にとっても幸せな言葉でした。

私が女学校二年生の年、昭和十六年（一九四一）十二月八日に真珠湾攻撃が起こりました。それからわずか四ヶ月後の四月十八日、東京への初めての空襲がありました。その日はちょうど私の誕生日。お昼頃のことで学校にいました。爆撃を受けた中心は荒川区西尾久周辺でしたが、学校中が大騒ぎで、帰宅するにも大変でした。それからしばらくの月日は静かでしたが、やがて連日連夜の敵機来襲。昭和二十年三月十日の東京大空襲では、下町方面の空が

真っ赤に染まり、なかなか鎮火しませんでした。
私たち女学生は女子挺身隊として動員され、当時日本最大の軍用機製作所であった中島飛行機に勤務。事務的な仕事や部品の図面を用賀にあった工場まで届けるなどの仕事をしていましたが、時が進むにつれ、中島飛行機に対する度重なる空襲、そして資材がどんどん無くなって、心の中では、こんなことで日本は勝てるのかしら…と思っていました。
中島飛行機では敵機が来れば低空飛行で狙われて、地面に伏せて友だちと逃げ惑いました。あるときは防空壕へ逃げ込むのが遅れ、でもその防空壕に直撃弾が命中して友が犠牲になりました。それ以降私は防空壕が怖くなり、入ることができなくなりました。
三月十日の空襲からは、毎夜着の身着のまま寝ることにしました。空襲警報のサイレンが鳴ればぱっと出られるようにと逃げ支度です。
私は母と二人で暮らしていましたが、五月二十四日、母が淀橋病院（現東京医大）へ入院することになり、リヤカーを借りて入院させたその夜は一人で寝ていました。母の入院でくたびれて、めずらしくぐっすりと眠り込んでいましたら、私が一人でいることを知っていた裏の家のおばさんが「道子さん！道子さん！」と窓を叩いて起こしてくれました。びっくりして外へ出ましたら、すでに火の手が上がり、宝仙寺の大銀杏が大きく揺れています。
青梅街道から三鷹の中島飛行機へまっしぐらのB29の連隊で、空が真っ黒に見える数でした。B29はとても大きな飛行機で、その飛行機から爆弾・焼夷弾がいつ終わるともなくばら撒かれ、いま思ってもぞっとします。みな夢中で、どこへ逃れるのか、逃げる場所もなく、泣きわめき、叫ぶ声。子どもを連れた若いお母さん方も何人もいましたが、背中におぶった赤ちゃんのはんてんに火がついて、私は気づけば何度も払って、そうして右往左往しながら氷川神社の方へ行き、静かになるのを一人震えながら待ちました。
二十五日の朝、ようやく空襲警報が解除になりましたが、家に戻る道は一面の焼け野原です。それでなくても青梅街道の北側、いまの町名でいえば中央の地域は疎開命令が出ていて、人はもちろん家も取り壊されていました。地面は熱く白い煙がチロチロ、靴底がゴムでしたからぺたぺたとくっ付いて歩けません。何人も犠牲になった方が横たわり、まるで地獄図を見るような惨状でした。

昼頃になってようやく地面の熱気がおさまって家に辿り着くと丸焼けです。いまの中央線の大久保駅が遠くに見え、防空壕に入れておいたものはだめ、また防空壕へと一生懸命逃げ込んで、そこで亡くなった方も大勢いました。昨夜逃げる時に無我夢中で手に持った物もどこでどうしたのか、頭の中は空っぽでした。それでも夕方になって母の入院する病院を訪れると、母は病院の地下へ避難したおかげで無事でいてくれほっとしたのです。

家を無くした母と私は、荻窪にあった中島飛行機の上司のお宅を間借りして暮らし始めました。四面道の付近は奇跡的にも空襲の難を逃れていました。終戦はそのお宅で迎えました。母と二人玉音放送を聞きながら、戦争に負けた悔しさやこの先の不安よりも先に、敵機の襲来に怯える日々から解放される、ちゃんと眠ることができると思ったものです。

私の主人は、義理の父の甥っ子で、歳は六歳上でした。戦争中は満州へと行き、生きてかえってこれたら結婚させると親同士が決めていました。家を守るためのお膳立てができていて、当時はそんなことは当たり前でした。その主人は戦後しばらくして帰ってくることができました。

荻窪の上司の家にも疎開していた奥さんとお子さんが戻られましたが、私たち家族はしばらく留まりました。当時の食糧は配給制で町内に一日これだけ。それを分けるのですから、大根がちょっととその葉っぱだけなんてことがよくありました。荻窪の奥の方や千葉の農家へ買い出しに出かけると、上司のお子さんがまだ小さく買い出しも大変でしたから、上司の家の分も買ってくるなどして、助け合って生きました。その奥様もいま九十六歳、ご健在で、私は月に一度お見舞いがてら昔話をしに出かけているのです。

私たち家族は、新潟の親戚から物置小屋を譲り受けられることになり、向こうで解体して東京へ運び、こちらの大工さんが組み立ててくれることになりました。中野坂上へ戻ることにしたのです。最初は戸も畳もなくて…、葦簀(よしず)で囲って、その小屋の自宅で、主人と私は結婚式を挙げました。

母は大正十五年から餅菓子屋の「伊勢屋」を営んでおりましたから、戦後再開できてからは私も手伝って生業といたしました。結婚式を挙げた最初の小屋から始まって、戦後三回ほども家を建て直しました。

戦争は、勝っても負けても嫌なものです。失うばかりです。親を亡くした子どもたちは、浮浪児となって新宿あたりにたくさんいました。全てが疲弊して国に力がないものですから、そういう子どもたちを守るものもなかった。学徒動員で出征した頭の良い、気骨のある男の人たちは大勢戦死して、あんな良い人が…とみんなで幾たび泣いたかわかりません。

それでも、戦後の復興は早く感じました。それは貧しかった時代、私たちの年代は、日本再建のため、そして自分が生きるということに寝食を忘れて無我夢中でがんばったからではないでしょうか。いまの日本がこうしてあるその一翼を担った世代と思っているのです。

一男、二女に恵まれて、いまは孫も曾孫もおります。成願寺様の年中行事に参列し、春秋の観音詣りでお仲間のみなさんと各地を巡り、お話するのを楽しみに、また、中野坂上の変貌に驚きながら暮らしております。

合掌

春の坂東観音詣りの報告

五回目を迎えた坂東三十三観音霊場巡り。この春は茨城県内三ヶ寺を巡拝しました。成願寺に朝七時集合、観音堂にてご祈禱後、小学生二人を含む四十一名は大型バスに乗り込んで常磐道へ。

最初に向かったのは土浦市の二十六番清滝寺。柿畑や水田の広がるのどかな景色を進むと、パラグライダーを楽しむ人が晴天の空をふわふわ。なんとも気持ちよさそうです。清滝寺の少し傾斜のきつい石段を上がると、天保年間（一八三〇～一八四四）に再建されたという朱塗りの仁王門が迎えてくれました。ここ清滝寺は、推古天皇十五年（六〇七）に竜が峰の山頂に創建されたという古刹。一時は七堂伽藍を備え隆盛を極めましたが戦乱によって焼失し、江戸時代になって現在の地に移されたといいます。しかし昭和に入ってからたびたびの不審火に遭い、聖徳太子作とされた聖観音像、山門以外の全ての伽藍を焼失。いまの本尊様と本堂をはじめとする御堂は、地元有志と信者の手によって再建されたそうです。納経所では地元の方々が当番で朱印をしているそうで、お寺をお守りする信仰心の深さが窺えるようでした。

第 26 番・清滝寺

バスは三十分ほどで筑波山へ。ゴールデンウィーク中のことだけあって、登山スタイルの観光客で賑わっています。まずは二十五番大御堂へ。このお寺は延暦年間（七八二～八〇六）に徳一法師によって創建され、のちに弘法大師が入山して知足院中禅寺と号しました。江戸時代には徳川家からの崇敬を受けて隆盛を極めましたが、明治の神仏分離・廃仏毀釈によって中禅寺は廃寺に。それが戦後再興されて現在に至っているそうです。薄暗い堂内に安置された柔和な表情の千手観音様にお経をあげさせていただきました。

一行はケーブルカーで新緑を楽しみながら筑波山の山頂へ。それぞれが山頂散策や筑波山神社参拝、みやげ物屋を楽しんで山を後にしました。

第 25 番・大御堂

楽法寺でお話をいただく一行

第 24 番・楽法寺

最後に訪れたのは二十四番雨引観音楽法寺。バスを降りて参道を進むと、放し飼いにされたクジャクの出迎えを受けます。観音様のお住まいになる観音浄土を表すように四季折々に花々を育てているそうですが、花のない時期にもその美しさを楽しめるようにとクジャクを放しているのだそうです。厄除・延命・安産・子育ての霊験あらたかな日本で唯一の延命観世音菩薩様（国指定重要文化財）を参拝させていただきました。

その後、眺望の素晴らしい客殿に特別に招かれて、茶菓のおもてなしを受けながら、ご住職川田興聖御前様にお話を頂戴しました。

お昼は楽法寺様が主催される薬膳中華料理「三笠」のお料理。医食同源、地産地消をモットーにした身体に優しい食材、お味付けで、お寺の湧き水「延命水」が使われているそうです。金針菜、麦門冬、クコの実、松の実、銀杏、椎茸、筍、干し貝柱が入ったフカヒレ入り薬膳スープが特に秀逸で、身体を温めて咳を止め、美白の効果まであるそう。一行は観音様の功徳と料理の効果でますます元気に美しく、東京への帰路に着きました。（了）

山内短信

◎七月十一日（木）盂蘭盆先祖まつりのお知らせ

午前十時半　受付開始

正　　午　開山・歴住諸大和尚　追善供養

午後一時　説教「このままでは人間あぶない」

静岡県 可睡齋齋主 佐瀬道淳老師

午後二時　先祖まつり法要・檀信徒総供養

＊東京近郊は七月十三日～十五日がお盆です。その間、寺から檀信徒各家へお棚経に伺います。これまで伺っていないお宅で棚経をご希望の方は、早めにお申し込みください。

◎秋の一泊坂東観音詣りのお知らせ

六回目の坂東詣りは千葉県の霊場を巡拝します。

日程　十一月十一日（月）～十二日（火）

行程　成願寺朝六時半集合・出発―二十八番滑河観音龍正院―二十七番飯沼観音円福寺―三十二番清水寺―鴨川温泉『鴨川館』泊―三十三番那古寺―三十番高倉観音高蔵寺―三十一番笠森寺―二十九番千葉寺―成願寺夕五時半帰着予定　　会費―三万八千円

＊十一日のみの日帰り巡拝受け付けます。三十二番まで同行し、鉄道にて帰京。会費一万三千円（帰りの電車代は各自負担）。

◎石巻東保育園建設に支援

東日本大震災で壊滅的な被害に遭った宮城県石巻市渡波地区では、幼稚園や保育園の再開が未だできず、仮園舎などの利用が続いています。この度、同地区の洞源院様が中心となり、保育園の建設を発願されました。成願寺として支援に賛同しております。

◎たから第六天大祭の報告

去る五月十二日（日）、成願寺の境外堂「たから第六天」の大祭が執り行なわれました。当日は近隣の住民が参集。参列者の家内安全や諸縁吉祥が祈られました。

◎茶の湯の会「お茶会開催」

当山と縁の深い福井県天龍寺笹川浩仙老師の坐禅会参禅者の有志により、茶道の流派を越えた同好会「茶の湯の会」お茶会が昨年十一月二十五日本堂地下にて催されました。はじめに本尊様のために特別に点てられた一盌が供されました。